

# COMPASS



答えの無い問いを探していく。そんな時代だから目指す方位を指し示すものが要だ。そのようなものに私はなりたい。



県教育委員会では、児童生徒の学力向上を図るため、塾講師を授業補助及び補習に活用する学習支援モデル事業を行いました。  
本事業を通して見えてきた、教師と塾講師の連携による効果的な指導方法や授業で生かせるポイント等をまとめました。学習サポーターや市町村独自の学習補助者等がいる場合の参考にしてください。

## 事業の概要

### 【実施校】

○千葉県内公立小中学校10校（小学校5校、中学校5校）

### 【実施学年、教科及び期間】

○小学校6学年の算数、中学校3学年の数学及び英語 週2回派遣

○授業補助：年間200時間 補習：年間100時間（準備含む）

### 【検証方法】

○全国展開をしている業者の教科テスト（算数・数学、英語）と児童生徒及び学校へのアンケート調査によるクロス集計

※5月（塾講師配置前）と12月（配置後）の2回実施

○授業補助及び補習の参観、塾講師等へのインタビュー等

## 教科テストの結果やアンケート調査、授業補助及び補習の参観等による分析の概要です。

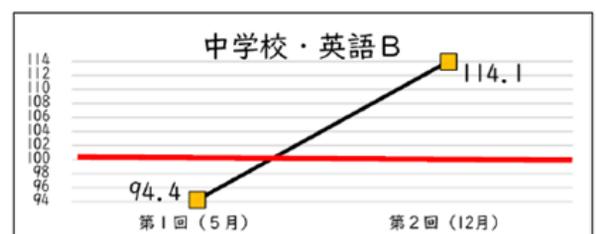
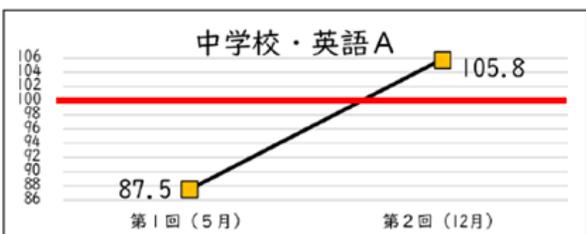
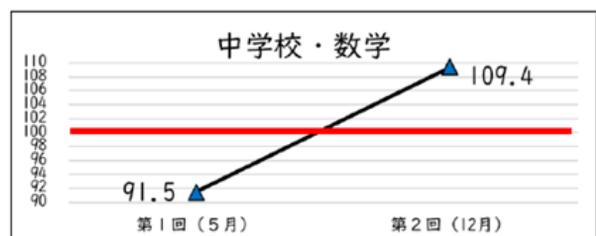
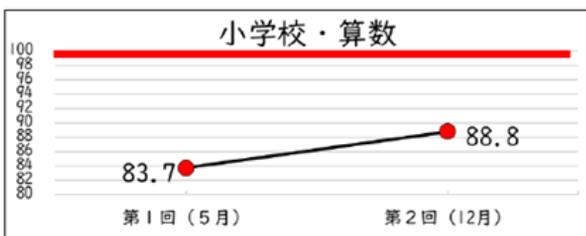
### 【教科テストの結果から】

★塾講師の配置により「算数・数学」「英語」とともに**学力が向上した**。

特に、中学校では、5月は全国平均を両教科ともに下回っていたが、12月では両教科とも上回った。

教科テスト結果の変化

※対象校平均正答率を全国平均正答率で割った値（全国を100として）



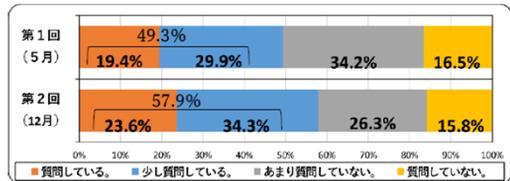
## 【アンケート調査（児童生徒）の結果から】

- ★「補習に参加してよかったですか」については、児童生徒の多くが肯定的回答をしており、**学習意欲の向上につながった。** <図1>
- ★「わからないときは、自分から先生に質問していますか」については、質問している児童生徒が大幅に増加しており、塾講師が授業補助と補習を行ったことで、**学習意欲の向上につながった。** <図2>

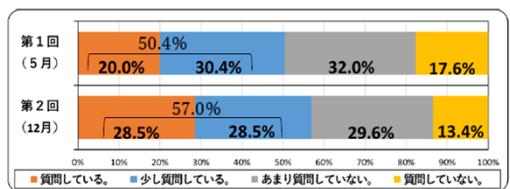
<図2>

「授業でわからないときは、自分から先生に質問していますか。」についての児童の回答結果の変化

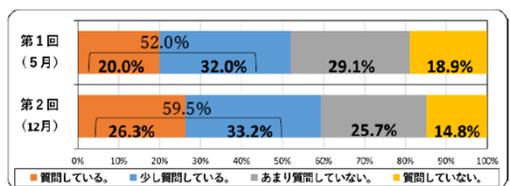
【小学校・算数】



【中学校・数学】

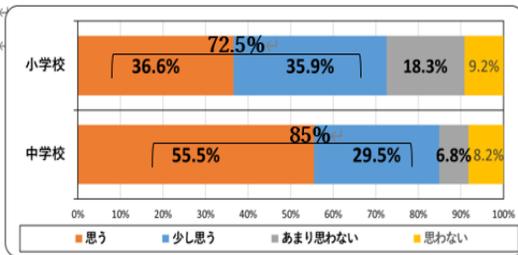


【中学校・英語】



<図1>

「補習に参加してよかったですか。」についての児童生徒の回答



## 成果と課題（○成果 △課題）

### 【教科テストの分析結果から】

○全生徒を対象とした教科テストの結果が上昇していることから、**授業補助及び補習による学力向上の効果**がある。

→授業補助による**児童生徒のつまずき等の把握と個に応じた補習の連動**がポイント

△指導力の高い塾講師が、授業補助でTT指導にとどまっている。

△補習に参加する児童生徒の学力差が大きく、指導の焦点が絞れない。

〈R7対応策〉・塾講師が別室で、習熟度別などの少人数指導に当たれるようにし、より個に応じた学びの充実を図る。

・補習募集時に「基礎コース」「応用コース」の設定や曜日によってコースを分けるなど対象を焦点化する。

### 【アンケート調査（児童生徒）から】

○指導者が増えることで、質問しやすい状況となり、自分から質問する児童生徒が増えたことから、**学習意欲の向上にも効果**がある。

# 教師と塾講師（補助者）の連携による効果的な指導方法をまとめました！

## ポイント①（同一教室内での習熟度別授業）「個別最適な学び」の創出

教室内で習熟度別に分け、担任と補助者が児童生徒の実態に合わせた個別最適な学びを実施する。

問題演習の場面：担任と補助者で下位層と中・上位層の分担を決めておく。

- ① **つまずいている児童生徒を教室の前に集めて担任が指導（個別指導）**
- ② **他の児童生徒はレベル別課題に取り組み、廊下にある解答で自己採点**  
→ **正解者：次のレベルの問題に取り組み（上位層を放っておかない工夫）**  
**不正解者：補助者へ質問し、解説を受ける（きめ細かな指導）**

※**レベル別問題を用意すること**で個別に学習を進められる。

## ポイント②（別教室での習熟度別授業）

単元末や年度末のまとめの時間に習熟度別に教室を分け、児童生徒の実態に応じた少人数での指導を行う。個に応じた指導を充実させることで、知識等の定着を図る。

指導者が複数いることで、下位層と上位層それぞれに支援を行うことができます。児童生徒が「わからない！」とつまずきを表現できるような普段からの人間関係の構築や環境づくりが重要です。



授業補助者がいる授業をどのような形態や進め方で展開するか、事前の打合せと準備が重要です。

また、指導者が複数いることで、2分の1の時間で採点や確認が可能です。そこで捻出した余剰時間をどう活用するか、予め想定し、準備しておくことが学力向上に繋がります。

なお、教員免許を所有していない塾講師や学習サポーターでも、教員の指導計画のもと、教員が評価を行うことを条件に、少人数授業（別室）での授業が可能です。

※年間通してではなく、単元ごとに児童生徒を入れ替える等の留意が必要。



## ポイント③（授業補助と補習の連動）

授業補助の際に、**担任による授業の進め方や児童生徒のつまずき等**を把握する。それらを踏まえ、補習など個別の指導につなげることで、**知識等の定着を図ることができる**。 ※学習サポーターを授業補助+補習に活用することもお勧めです！！

授業補助と補習を連動することで、きめ細かく学習の状況を把握・分析でき、個々の児童生徒に合った学習の進め方ができますね。このことは、個別最適な学びにおける「**指導の個別化**」にも繋がっていきます。



現在、県教育委員会では、塾講師や学習サポーターなど魅力ある民間人材を学校へ派遣しています。また各市町村においても独自で人材を派遣し、児童生徒の学力向上を図っているようです。

授業補助（TT）や補習がある日の授業を、ただ授業を進めるのではなく、単元内容や児童生徒の実態に合わせてどのように進めるか事前に考え、**個別最適な学びが行えるよう**準備することが大切です。

